

氏名(本籍)	植 ^{うえ} 田 ^だ 今日子 ^{きょうこ} (奈良県)		
学位の種類	博士(社会学)		
学位記番号	博甲第4540号		
学位授与年月日	平成20年3月25日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	人文社会科学研究科		
学位論文題目	山村の過疎化とムラの存続可能性についての研究： 存続困難な状況におかれた山村のムラの実践から		
主査	筑波大学教授	博士(文学)	好井裕明
副査	筑波大学教授	博士(社会学)	奥山敏雄
副査	筑波大学講師		葛山泰央
副査	早稲田大学教授	文学博士	鳥越皓之
副査	愛知教育大学准教授	博士(社会学)	足立重和

論文の内容の要旨

本論文の目的は、存続困難な状況におかれた山村のムラでのフィールドワークから、そこに住む人びとによって捉えられていたムラの存続条件を明らかにすることで、ムラの消滅という現象が、どのような問題であるのかを明らかにすることである。かつて米山俊直は、なぜわれわれはムラに惹きつけられるのか、その理由を、それが一つの完結した「小宇宙」であるからだと述べている(米山俊直, 2006, 『米山俊直の仕事一人、ひとにあう むらの未来と世界の未来』人文書館, 396頁)。「むらが生活空間として確立すると、そこには生活に必要な一組の文化要素がととのえられる。たとえどんなに貧弱であっても、人間の誕生から死までの、一切の行動を可能にするための準備があるのだ。たとえば、分娩、育児、教育、労働(衣食住その他生活資材の獲得)、配偶者選び、休息、老人の世話、病人の世話、葬儀、死者のまつりなどについて、精神的、肉体的な諸条件を最低充足するためのものが、どのような小地域社会でも存在しなければならない」(米山, 2006, 24-25頁)。米山のいうようにムラを捉えてみれば、ひとつのムラが消滅を迎えることは、単にそこに住む人がなくなったということ以上に、ひとつの社会および文化が終わりを迎えることといえるだろう。そのような相対的に高い完結性をそなえていた社会形態といえるムラは、現在、日本のあらゆる場所で存続が困難となっている。

国土庁が行った調査(国土庁地方振興局, 2000, 「過疎地域等における集落再編成の新たなあり方に関する調査《平成11年12月実施》」)によれば、わが国で1960年から1998年までの間に消滅した集落は1712にのぼるといふ。今後10年以内に消滅が予想される集落数は全国で392、いずれ消滅が予想される集落数は2393を数える(国土交通省, 2007, 「過疎地域等における集落の状況に関するアンケート調査結果(中間報告)《平成19年1月》」)。戦後の高度成長期以降、一貫してムラという小さな社会形態は姿を消し続けていることになる。いったいなぜ、集落ないしムラはこれほどまでに存続困難となってしまったのだろうか。消滅数だけを見れば、集落やムラはわが国から消え果てる存在であるかのようにみえる。しかしながらこの数字に埋もれて、困難な状況におかれながらも、頑なに存続しようとするムラが一方に存在していることも

また事実である。本論文では、現代においてなおそこに暮らす人びとがムラを存続させようとする能動性を、ムラの「存続志向性」とよんでおく。この「存続志向性」を手掛かりとしながら、わが国でムラがもっとも集まる山村において、過疎に苛まれる人びとにとってのムラの存続条件を本論文では明らかにしようとする。

先行研究においては、ムラの消滅という社会現象は、大きく二つの流れにおいて捉えられてきた。一つは敗戦後、日本が急激に“豊か”になりつつあった高度経済成長期において、若い担い手人口を奪われつづけ、戦後の好景気の“舞台裏”にされてしまった農山村の窮状をとらえた「過疎論」の諸研究である。今一つが、村落社会研究会において展開された、「ムラ」および「イエ」の解体をめぐる諸研究である。主に農村社会学者らによって展開されたこのムラの解体をめぐる論争は、わが国固有の文化的特質をもつことを前提とした「ムラ」と、その構成単位である「イエ」の存在原理そのものを追究してきた研究を背景としている。本論文では先行研究をふまえたうえで、高度成長期以降、止むことのないムラの消滅という社会現象が、これまでどのような問題として捉えられてきたのか明らかにした。そしてムラの存続条件がそれぞれの文脈においてどのように提出されてきたのかを吟味した上で、分析視角を提示した。

一方で“過疎”という問題認識のあり方は、高度成長の“舞台裏”とされてしまったことに原因を求めている限りにおいて、その批判の矛先は農工商格差や農村と都市の格差をもたらした国策へと向けられてきた。そこで論じられてきたのはいわば農／工間（第一次産業と第二次、第三次産業）の“不均等”発展政策や、農山村／都市間の“格差問題”であったといえる。しかしムラの解体や消滅は、確かに市場経済の席卷や「政策の偏倚性」によってももたらされたものの、ムラから出て行くことを決めたムラびと自身によっても引き起こされてきた。過疎問題をあくまで過密問題との表裏一体の現象としてとらえ、過密空間としての都市と、過疎空間としての農山村との格差解消にその解決をもとめる限りにおいて、ムラの消滅が、そこに住みつけようとする人びとにとっていかなる問題であるのかということ自体に社会学は近づくことがなかったのである。翻って、ムラの解体自体を否定的にも肯定的にも捉えることなく、ムラが解体する条件について議論を展開してきたのが農村社会学者らであった。端的にいえば、日本の農村社会学においてムラはイエの生産様式を軸に定義されてきた。というのも、ムラはその構成員である小経営体としてのイエを補完するものとして説明されてきたからである。そもそもムラの解体、という課題が取り上げられなければならなかったのも、小経営体であったイエが資本主義的経営でなりたつものへと変化しつつあったからであった（細谷昂1998、『現代と日本農村社会学』東北大学出版会、10頁）つまり、小経営体から資本主義的経営に依拠するもの（たとえば家族の勤労者化）へと変容しつつあったイエをもって、イエを補完するものであるムラの解体は論証されてきたといえる。裏返してみれば、ムラが存続していることの条件は、イエが小経営体であるか否かという、“イエの生産条件”から演繹的に論じられてきたのであった。

本論文はこれらの先行研究に多くを負いつつ、ムラが解体や消滅に瀕するという事態が、そこに住む人びとにとってどのような問題として捉えられているか、というところからムラの存続条件を考察するものである。すなわち、ムラの過疎化ないし消滅は、そこで残り住むことを望み実践している人々の視点にたつて、どのような問題であるのかを論じられなければ、そこに住む人びとにとってのムラの存続条件には近づくことがないからである。本論文が明らかにしたのは、ムラが存続するための条件でもなく、ムラの構成体としてのイエが小経営体でありつづけるための条件でもない。あくまでそこに住む人びとにとってムラが存続する、ということが何を条件に捉えられているのかを明らかにするものである。

では消滅の可能性に瀕した四つのムラの事例の考察から、端的にムラの消滅がどのような問題であったのか本論文で定義を試みれば、それはムラで長い時間をかけて培われてきた規範や技能、秩序が、通用しなくなってしまうという問題だったといえる。つまり、ムラで長い時間をかけてたえず改変されてきた、生活するうえで必要とされる規範や技能、秩序が、もはや価値のないものとして同じムラ人に認識されてしまうという問題である。本論文がとりあげてきた事例にひきつけてみれば、ダム計画や震災などによって、突如一

齊にムラを離れるか否かを選択するという事は、それぞれの世帯がこれから暮らしていく社会を選択する契機と言い換えることができる。誰も互いの家に口出しすることができないその選択は、今後もムラで培われてきた規範や秩序、技能が存在する社会で生きていくのか、それともそれらの通用しない、異質な社会で生きていくのかを選ぶことだからである。するとムラに残ることを決めた人びとにとっては、ムラを去るという選択は、単に家や人の数が減って寂しいということ以上に、ムラが備えてきた秩序や規範の拒否として受け止められることになるだろう。実際には人びとはムラを去っていく人を激しく蔑むわけではない。しかしムラにこれからも生きようとする人びとにとっては、ムラを去られることは、やはりムラが「住むに値しない場所」として認識されるということに他ならなかった。

日本にあまねく存在するムラを同質に扱うことは避けなければならないが、ひとまず一定の土地への定着性の高い小社会と限定してみれば、ムラが備えている規範や秩序の性格をひとつ挙げることができる。それは、その土地への定着性を前提条件とする「時間的普遍性」(内山節, 1988, 『自然と人間の哲学』岩波書店, 234頁)に価値をおく規範や秩序である。「時間的普遍性」とは、一定の場所でしか通用しない普遍性のことであり、哲学者内山節による概念である。内山は普遍性をふたつの軸において以下のように捉えている。一つは近代技術がその基底としている「どのような場所においても通用する」ことに価値をおく「場所的普遍性」である。そして今一つは「時間を超えて普遍的なもの」、すなわちどれほど時を経ても通用することに価値をおく「時間的普遍性」である。したがって反面、「場所的普遍性」は時を経るほどに通用しなくなり、「時間的普遍性」は一定の場所においてしか通用しないということになる。そして内山は端的に「場所的普遍性」による「時間的普遍性」の否定こそが近代であったと述べている。この内山の提出するふたつの普遍性からふたたびムラの規範や秩序を捉えてみると、ムラが特定の土地への定着性の高さをその特質とするならば、ムラには少なくともその場所にとどまって暮らす限り、生活に困ることのないような「時間的普遍性」に価値をおく技能や規範や秩序が培われてきた社会といえるだろう。そしてそのような技能や規範や秩序が、同じムラ人によって価値のないものとして認識されるということが、ムラが過疎化／解体するという問題に他ならなかった。そしてムラの生活が培ってきた時間的普遍性に価値をおく技能や規範や秩序への信頼こそが、ムラの存続条件といえるのではないだろうか。

審査の結果の要旨

本論文は様々な理由によって過疎化を強いられてきた山村をフィールドとし、丁寧な現地調査をもとにして存続の危機にある山村で住み続けようとする人々の実践を読み解いたものである。概要にあるとおり、従来の山村研究の枠組みを批判的に検討したうえで、環境社会学、とくに生活環境主義の発想を取り入れ、人々の生活という視点から、ムラの存続可能性の条件を考察した点は独創的であり、評価できる。ただ問題点を述べれば、ムラを存続可能ならしめている人々の実践を読み解き、解釈する作業において、普遍性の高い哲学者の概念をいきなり採用していることと言える。普遍性の高い概念で一般的な説明を志向すること自体、評価できるが、できれば、丁寧なフィールドワークの成果をもとにして、人々の思考、思想、推論からムラを存続可能ならしめている条件を抽出し、語りだしたうえで、一般的な概念と比較検討し、説明を志向するという作業がほしかったところである。とはいえ、本論文自体、山村研究、環境社会学において独創的な研究であることは確かであり、著者の今後の研究の展開のなかで、さらなる深化が十分期待できる作品であるといえる。

よって、著者は博士(社会学)の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。